

三河 アララギ

平成二十六年

八月号

第六十一卷 第八号



ニューヨーク日記(94) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

March 22, 2014 : Cooking with a Himalayan Salt Block

Blue Shoe Diaries



ちょっと変わった焼き肉やってみました～ヒマラヤの塩の塊を熱して（ストーブやレンジで）その上で焼き肉!塩だから食材には塩分付けなくて焼きます。焼き上がりは鉄板と大して変わらないしちょうど良い感じに自然に塩つけが付いて美味しい!野菜も上に火が通るまで乗っけるだけで美味しく出来上がり後は一緒にユニオンスクエアのファーマーズマーケットで見つけたマイクロ菜でシンプルなサラダを作って何だかバランスの良いディナーの出来上がり!

Cooking with a Himalayan salt block! It looks interesting, right? So you heat up the block on a stove top or slowly in an oven. Then you prepare what you want to cook. In this case, I sliced thinly a rib steak. The key is not to salt the meat because it will naturally absorb the salt from cooking it on top. You want a quick sear on the meat and it gets seasoned perfectly. If you cook it too slowly or let the block cool off too much (therefore prolonging the cooking time), your meat may get too salty. I also threw on some baby zucchinis and baby corn which turned out great! You can snack on the corn endlessly. For a little brightness, I added a micro leaf salad that I found at Union Sq Farmers Market and voila, a nice and healthy dinner!

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

暑かりし一日の光傾きて
幼児の強き泣き声遠し

P 120

ま昼間の庭の植込み
幽かにて鳴かざる
蝉の樹を移りとぶ

P 123

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

はこべらしき長き枯草昨へ来て雉鳩一羽雨樋に入る

二十才より胸を背骨を病み続け未だ生きてをり四十八才

あしうらの痛みはげしく起き上り歩み馴れゆく音羽川べり

空梅雨からつゆ

蒲郡 岡本八千代

淡々とまた飄々と見上げたりけふの西浦の空梅雨からの空を

わが恋し隣あんずの杏の花咲かず咲かずともよし逝あきにし千晶よ

今頃は軽井沢も空梅雨か君と逢ひにし在りし日おもふ

けふもまた空梅雨らしきに明けてくるそれはそれとて自然じねんほうに法爾か

何ごととも自づとすぎてゆくごとし淡き水色の空の下の私

海の上の灯台二つ代はり代はり赤と青とが海原照らせり

「潮風」といふ名の舟に寄する波ひたひた弱し夕べの小波さざなみ

舟止めに小舟の二つつながれをり吾もその石に腰下ろしてみる

繋がるる小舟二つが波ゆれてけふの小波さざなみのゆらゆらの上

娘帰り六畳一間に寝ころびても思ふごともの思はざり

まんまる

東京 今泉 由利

未だまだ空の青さの残りつつまんまるまるまる満月いづる

パソコンに疲れしまなこ和みゆくまるまる月のまんまる光り

少しづつ私の位置を移しつつ一つ夜を居るまんまる月と

目に見えぬものは見えざるままにして月と私と遮るは無し

放射能を使ひこなせり私を直し放射能にて毀せしものを

横綱も審判呼びだし観客もみな丁髷よ江戸錦絵は

踏み締める一步一步に湧きいづる白白真白奥多摩の山

登りゆく足元すつきり雲の中粒子の粒子増しつつ

猛烈に降り降る雨をふくみつつ撓み撓める柏葉あじさい

水と墨筆と和紙とを解きゆきて富岡鉄斎理想の境へ

自転車

豊川 弓 谷 久 子

啼き声はいつもの鴉か明けやらぬ静かな空を通り過ぎゆく

我ひとり雨の降らぬを喜びて自転車こぎ行く姉のもとへと

お互に生きぬればこそ今日も又顔見に来れたと姉の枕辺

軽口を利き合ふ程に馴れにけり姉の世話するヘルパーさん

我が庭に過ぎたる花の紫陽花も昼は萎えをり今日の日ざしに

はやばやと田植えすみをり早苗田は青田となりて風になびける

青田の中に幻を見る水田に苗とる母と代掻く父の

ひっそりと花季過ぎしかくちなしの香りたつ程今年は咲かず

「苦も楽も夢と思へば愚痴も無し」残して呉れし色紙一枚

梅雨空に漸く戻るか淡々とねむの花咲きぬ水無月の尽

故郷

新城 青木玉枝

足裏に玉露ふくむ青き草踏みて散歩の朝のひとつき

寒き冬も桜の春もすぎゆきて山里の夏のそよ風嬉しき朝に

山並の明けゆく空は澄み渡り朝陽をうけて緑の映ゆる

明日の身は誰にも分らぬ運命さだめにてせめて楽しく今日のひと日を

二年目の夏を山里に迎へたりこの頃思ふ故郷恋しき

浅はかなわが身をせめてやるせなき踏み間違へし道たどる今

伊丹よりわたしは蒲郡くへ帰りたい足萎えの今悔ばかり残る

夢の中嫁の優しき笑顔見る何故出て来たか涙こぼれて

今頃は伊丹に住めば淡路沖瀬戸の島々部屋より眺めて

今更に後悔の日びの明け暮れに自分の愚オロかさ身に沁む朝に

沙羅の花

豊川 内藤 志げ

降り降らず窓より眺む沙羅の葉の一つの雫なかなか落ちず
落ち花も木に咲く花も丸くなり雨の一日の暮れてゆくなり
真白なる花卉に黄の芯清し沙羅の花盛り梅雨の雨の日
丸まるき沙羅の蕾の白々と雨を待つかなわれも雨待つ
声掛けに返事をしつつ鋏の音振り向きもなき先生庭師
廣ごれる小麦の穂波は秋の色今が刈頃と思ひつつ通る
藪に沿う日陰の径は久しぶり足にやさしき草徑を行く
緑濃き竹の群よりぬき出でて筍高し傾きもなく
篁を大きく揺らす終日に竹の紅葉はタタキに溜る
ビニールのトンネルの中に隠したる西瓜を見だす鴉はするどし

著^{シヤ}我^ガの群落

岡崎 林 伊 佐 子

裏山の杉下かげに自生する著我の群落はな明りする

散歩する野辺に咲き継ぐ螢袋に風に吹かれて花虻あそぶ

空木^{うつぎ}の枝にもりあお蛙の産卵する白き泡だま池に揺れるる

産卵を終えて木の枝に昼寝するもりあお蛙は何を夢みる

草むらのみどりが中に笹百合の優美な薄色かぜに揺れるつ

笹百合の球根あらず野猿らに今年は花みぬ絶滅の危機

農繁期もゲートボールを楽しみぬ野良着姿の峡の老人

花虻が昼の影ひく西瓜畑われより先に受粉してとぶ

草汁のしみたる手にて辞書を繰る夜のひととき至極な時間

夕闇に息するごとく光りとぶ螢にも来むつひのその日は

「かあさん」

豊川 安藤 和代

こんなにも揺らぐ青葉の目に痛く夫入院の朝となりたり

CTに夫の病巣くつきりと写りておれど信じられない

悲しみはすべて語らず友と居てみかんの花の香胸深く吸う

乾きたる夫のパジャマをたたむ時なぜか涙がながれてならぬ

庭に咲くスイトピー五色を見ておれば乱れし心も鎮まりてゆく

きっぱりと酒もタバコもやめて今私の事を「かあさん」と呼ぶ

「ガンバツテ」等とは夫に言えなくて百合満開を告げて帰宅す

福耳も幸せ黒子も持つ夫よせめて私の願い叶えよ

朝の陽の静けき中に枇杷の実の輝き初めて梅雨入りを聞く

畑隅の榊に満開の花咲きてもうすぐ何か佳き事ありそう

けん玉

蒲郡 遠藤 脩子

玄関の外ガラスに張りつきて毫も動かぬヤモリ一匹

けん玉を欲しとふ我れに夫は求め来大会用の正式けん玉

カッカツと乾いた音す夫がまたロコモに良しとふけん玉してゐる

レモンバームを束ねて軒に吊り下げぬ虫寄りこぬとベニシアさんが

ローズマリーの乱れし枝切り陽に干しぬ焚いて香りを楽しまむと

生え揃ふバジル苗抜きて小分けする我が廻りバジルの香り溢るる

小分けせしバジル苗は残らず捌けたり若き等は喜びびパスタに使ふと

花の本を開けばすぐにも判るのに記憶の中からその名呼びたくて

シンバル叩く玩具のように両腕を開いて閉じてやる気を起こす我は

自らを励ます時のメロデーは歌詞も朧な高校の応援歌

南天の花

豊橋 胃 甲 節 子

朝顔の吊り鉢一つ戴きて花の色など思ひめぐらす

植樹祭の皇后様のお手植ゑの一本をイタヤカエデと知りたり

卯の花も束の間の速さに散り果てて過ぐる日速し只々速し

うから等が十一年振りに吾に逢ふ涙々の胸にあふれて

弟よ心優しき弟よ如何ばかり辛き一生なりしぞ

後何日と計る体調弟よどれ程貴方は惜しまるる人か

間違ひであったと元気に夏を越す弟であれ夢の中でも

赤白の南天の花触れもせで朝々微かな雪かと積る

一年ぶり神田橋迄日傘さし杖つきよろよろ歩きて帰る

雨戸閉めガラス戸も閉めカーテン越し牟呂用水の優しき音を聴く

菜園

沼津 鈴木孝雄

熱暑順化などとのんびりして居れぬ気候変動人智を超えぬ

衣替えと言えどつくに夏服だ季節のけじめ今は昔に

植え込みの下に広がるドクダミの妖しく咲けり白き十字花

下部来て歩いて往きぬ自然園はたる群れ舞いしばし立ち居ぬ

散歩中犬に水やる老婦人熱中症は人のみにあらず

つり下がるキュウリ手に取り収穫す刺の痛さは菜園妙味

草取りで疲れた腰を伸ばし見る梅雨の休みに拡がる青空

急な雨畑に広げたタマネギを取り込まんとて自転車急ぐ

サヤインゲン昨日あんなに摘んだのに今朝はまたまた収穫適期

ナスの葉を穴だらけにする小葉虫いつか絶えんと今日も捕殺

揚羽

東京 富岡和子

友の個展ながき想いの結果はかなの細字で光源氏を

いずこへと大雨予報それて行き墨の百様旧友の輪

窪地あり泰山木と小さき滝都会の真昼の香りとしぶき

糠雨にひとときわノツポ十葉のチャーチへの道明るさ増して

さつき晴れ花魁草に緩りゆれ赤むらさきに黄すじの揚羽

丸花蜂のブレックファーストか贅沢に百合へダリヤへホタル袋へ

ねじれ花の知らせを受けて誘い合うかがみてつきぬ幼き日々を

浜木綿の花軸の花軸八本たくましい一番花の真白き麗姿

ハートの葉届いた鉢はイカリ草むかし訪ねた吊り橋の宿

梅雨晴れのアイロン仕事朝のうちみどりの風に襟元ゆるめ

梅雨と消ゆ

大阪 伊藤 忠男

霞む街消える山並み小雨空夜明け遅きや梅雨ただ中に

ほんの間の油断なりとて水かさの増すを見つめて何もできずに

満員の電車乗り込み邪魔なもの傘に鞆に髪振り乱す人

白と赤庭を彩るハナミズキ雨受け光る水無月の花

豪雨にも耐える水無月旧暦と思へど何かが違うこのごろ

今年こそベストフォーはと意気込みに硬くったか足鈍くなる

夢かけたブルーの戦士梅雨と消ゆ実力なりと思へど悔し

この歳になりて見ぬまま行けぬまま焦る年月短くなりぬ

梅雨だとして夢はふくらむ今の今明日は晴れの日きつと叶う日

我が母校「自考自成」は世代超え引き継がれるや消ゆること無く

衣更え

東京 足立晴代

許しの色濃こき花菖蒲水辺に咲きて競いあう

花水木道辺に植えし細木樹も年ごと育ちあまたの花を

梅雨に入り糠雨道ぬかを湿しめらせてふみしめ歩む吾またれも亦

変り行く雨雲流れ晴れ間にも茜あかねの空はのぞき見えたり

梅の実も丸々太り葉陰はかげよりのぞく顔々かわゆ可愛らし

早々と衣更えは思えども日々定まらぬ梅雨の空

山々の緑の陰に幾筋も残の雪の白くありしを

盆踊り身ぶり手ぶりも楽しげに据わりし人も立つ人も

招き人多勢集あまたいて賑にぎやかに祝う声々さざめきに

大正と昭和平成過し来て意義深き人生今更に

早苗

春日井 清澤 範子

境内は静かなりけり拍手を打てばチツチツと小鳥なくなり

喫茶にてマンゴジュースのひとつはのどごし冷んやりトロピカル気分

庭にある木犀の若葉は柔らかく勢のあり軽く剪定

八王子神社へ詣でる道の田はしつかり活着風にそよげり

行く道の早苗は青あを根付きみて家立ち並ぶを静かに写す

夫も吾も年重ねつつヘルニアの娘の頑張りに感謝をしつつ

風吹きて北の裏窓コトコトと今夜は雨音聞きつつ眠る

ヘルニアの医学書読みて吾が娘痛み続くもリハビリ励む

低気圧代わるがわるにやって来て春の嵐は軒先を叩く

杖をつきバス停にある公園に吾が歩めば小鳥飛び立つ

手向ける

東京 森岡陽子

師の友はそつと柩の横に立ち語る思い出別れの涙

突然の訃報の連絡受けし時余りの驚きただ嘘であれと

別れ時ぼつりぼつりと雨が降り涙と共に花を手向ける

夏の夕空にぼんやり浮ぶ月雲のごとくに白くふんわり

観音の足元迄もツツジ花白紅朱鷲色花の下駄なり

若き志士遠き昔に情熱で変革求めし記録追い追う

玄関はアールデコ風デザインの屋根から絡みし蔦は花咲く

朝顔の双葉が並ぶ雨の中開花期時の色は何色

夏空に六機並びし飛行隊思い出の五輪再びの夢

新緑の風を受け受け散歩時葉の間間からの日差し優しく

退院後

名古屋 近藤 映子

退院後又検診の予約あり経過観察まだく続きぬ

退院後リハビリ通院始まりて吾も老人の仲間入り成り

臯月晴れ夫の写真に手を合せ自宅の生活に感謝くくと

ふと夫に逢いたくて逢いたくて仏壇上の写真の前に

吾退院後早や一ヶ月過ぎてしまぬ汗ばむ六月よ

灰色の曇は西へと走り行く夜には雨かとカーテン閉めぬ

検診日右手足の自由ならぬ頼みは安藤先生の顔と発言

わが家の二匹の亀は健在なり物言はねども私の友なり

わが夫の初盆のお知らせはお寺より準備あれこれ又涙

我手足何につけても自由に成らず何につけても痛みの有りぬ

文学散歩

新城 半田 うめ子

松原の友より頂きしブルーベリー目の薬思くすりひ出すなり

常々に親切でありたり文学散歩峰田文一様は会長でありたり

さち子様洗濯店の作業にてよく働きてやさしき人なり

岡様とさち子様仲のよく常々我はたすけられたり

岡様は常にやさしく御指導をして下さりました杉山の人

旅行にてやさしき人の多く居り食品を多く頂きたりき

大空へ数羽舞ひをり何鳥か分りし事の無きことはなし

旅のやど目をさまして探しをり上着が無いと河合よし子

置き忘れ自動車の中へ脱ぎをけり長く着たりき古き上着よ

遠野

蒲郡 杉浦恵美子

三年前夫身罷りし同時刻を幡豆の国道走りてをりぬ

三年前は台風来たる荒天気こんなに違ふ今日の青空

門前仲町勤め帰りの雑踏に交じりて歩む我は旅人

命日を独り過すも侘しいが見知らぬ街の夜もさてまた

我が職を持ちたる日々も遠のけりその思ひ出は夫に繋がる

鼻濁音綺麗に発音するを聴くひとりの旅の小さな発見

白馬に恋せし娘の物語聴き終りても席を立ち得ぬ

老夫婦と我とのたった三人が遠野の観光バスの客なり

曲り家は六角牛山昇る日が馬面を差す造りと云へり

五百羅漢その殆んどは苔むして訪ふ人もなき谷間に立てり

ホタル

豊川 平松裕子

淡く淡く紫色に戦きゐる棟あふちの下にしばし休まむ

陽射し熱き墓地への坂を登りゆくすばやく横切るは青き蜥蜴か

真夜中までコトコトと煮る山の露色良く仕上げむ鉄釘入れて

五角形の我が稲荷ずしの片すみに今日はキャラ露を少し添へたり

鉢ごとに高さ違へど葉の伸びて我が家に鷺草育ちてゐます

鷺草は君への供養と育てをり今年の花の咲くが待たるる

御津川の源流近き沢付近ホタル光れり十余匹舞ふ

ホタル見むと出て来し我の門先にホタル一つが闇に舞ひゆく

ヘッドライト消してしばし息ひそめホタルの光闇に探しぬ

ホタル見て帰り来たれば幼らは白紙にホタルを描き始むる

菩提樹

豊川 小野可南子

夫が押す小型耕運機のそのあとを
一列なして続く椋鳥

耕やして黒ホクホクの畑土をせはしく
啄む椋鳥の群

畑土に潜みゐたりし地虫等を啄み
尽せよ椋鳥たちよ

明日はこここの黒土に唐黍とうきびを播か
にやならんと夫ひとり言

地を這ひて馬鈴薯キタアカリを掘り
てをり空青々とこの佐脇の広野

夫の手を煩わせずとも一人掘る
キタアカリ男爵インカノカガヤキ

私が一人で掘ったと夫々に分かつ
馬鈴薯箱に詰めつつ

農道のこの四ツ辻を渡りゆく雉子
の夫婦に車を止めぬ

菩提樹の花は過ぎたりこんもりと
樹型まどかに香りこもれり

うす緑のつぶら粒らの実の垂れて
円かに鎮もる今朝の菩提樹

花花草

豊川 山口千恵子

しっかりと根付き来たりぬ早苗の田みどりの列のくつきりとせり

勢ひつつ用水の水流れ込む植ゑ終へし田に水の満ちゆく

見て廻る植田の水の漬き具合水漏る畦のネズミ穴ふさぐ

梅雨の雨細く降りゐる昼さがり花花草の花小さくひらく

無言なる亡き母とゐたる夢の中ほのぼのやさしき感覚残る

まんまるの大きな月が出でてゐる無人となりしこの家の上に

庭の木々切り倒されて風通る無人の家に笹竹すくすく

おたまじゃくし逃げ惑ふ田に入りぬ畝間うねに見ゆる草をとらむと

ミニ蓮の丸き蕾の三つ出づ高く伸び来し丸葉の上に

フウランの蕾らしきもの出でてをり日々目守りゆかむ窓辺の鉢を

竹のことつもども

豊川 夏目勝弘

奥深くさやかになりし竹林の所どころに春の陽あかり

絶え間なく竹のもみぢ葉流れ散る竹の若芽の穂先にも触れ

ただただにしんしんと散る竹もみぢそのただなかに立ちてゐにけり

竹もみぢに少し明るむ竹林を足にやさしと踏み入りて行く

風ぐ朝あしたしき散る竹のもみぢ葉の耳にさやりし刹那の音を

移植には竹酔日ちくすいじつのある五月とか日本の竹は二月がよろし

傘をさし通れるほどに整備せよ寺の竹林はそこまで出来ず

農家での収入増ぞうをと竹林に力を入れしは長塚節

胸元をあけし女おみなの姿とも皮の開けはだしすらり若竹

竹林を渡る風の音すがし住んでもみたし竹林精舎

若返り

横浜 阿部 淑子

梅雨半ばひょうつぶ氷粒荒く降り来たり川と変わりて人間は戦ひとく

一本の花の出会いひともとに癒されて我が血管は若返りおり

(心と体の健康セミナーにて健康チエックの結果より)

ロボットは介護士並みに働くも雑談相手は未だにがてと

我が夫は詩吟となれば背を伸ばし吟じる声に友は驚く

半身が不ずいになりし歌の友再登壇に拍手は止まず

笹百合

豊川 白井 信昭

楚々と咲く笹百合の花追い求め尾根伝い行く砥神山へと

今はなき恩師偲ばむ行在所跡音羽の川に沿えるこの道

村の夜を新幹線は疾走する早苗田に映る一条の光

ベランダより闇夜に出入りす猫モモは人の見えざるものを見ており

燕 湯

「招待」 秋 山 逸 穂

太き腹をこするごとくに歩みおり丸の内に住む野良の猫たち
 縁側の柱にもたれわずかなる湯呑みの酒を口にふくみぬ
 白きもの持ち上げ運ぶ蟻の列今日の子報はところどころ雨
 かやぶきの屋根に音なくそそぐ雨地を打つときに荒き音たつ
 御徒町駅より三分離れたる燕湯みつけ散歩を終える

現代学生百人一首 東 洋 大 学

ケータイが切れて孤独におそわれる電源入れてみんなただいま

専修大学北上高等学校 二年

葛^か 西^{さい} 乙^{いっ} 貴^き

四分休符下から上へ書いてゆく空へ飛びたつ翼のようだ

聖ウルスラ学院英智小・中学校 九年

根^ね 來^{ころ} 怜^{れい} 菜^な

仕送りで何がいるのか兄へ聞く足りないものは家族だと言う

山形県酒田光陵高等学校 三年

西^{にし} 村^{むら} 芽^め 衣^い

『いじやよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

今の事すぐに忘れて困るわと言ひては母は新聞ひらく

おいしいと煮魚半身を食べて母はここには居らぬ姉のはあるかと

牧原正枝

掘りたてのじゃがたらいもを手によれば幼の可愛ゆき頬つぺを思ひ出す

竹島に東京の友と泊りたり思ひきり楽しくただただはしゃぎて

岩瀬信子

ほんのりと南瓜の香りするお茶を友らと飲みをり幡豆観音にて

ピンク色の籠に入れたるつるばら姫可憐な花のとどきし夕べ

石田文子

吾子からの思いがけないプレゼント還暦だから特別ですって

初夏の風の吹きくるこの窓辺二匹の猫の「ああうう」の声

森厚子

水面の泡大きく小さくはじけつつ我は浮遊すバブルジェットに

南窓開けはなちたれば聞えくる小学生らのはずむ声こゑ

山崎俊子

おこし池の水面かすかに触れて飛ぶ燕のすばやさ見てゐるひととき
遺されし吾の寂しさとめどなしけふは真つ赤な薔薇生けてみる

三田美奈子

友達と集へばともかく年金と病と介護の話題となりぬ
隣組の人らは一人また一人去りゆきつひに三軒の空家

水野絹子

真白なる富士の高嶺を仰ぎ見つつ緑の裾野をわれは巡れり
ナス苗とオクラの苗と鍬を持ち今日は朝から娘らの畑へ

牧原規恵

去年の春娘のくれしミニバラが今年も咲けり母の日近し
今日の雨わが庭隅の紫陽花の蕾に優しく降りそそぎをり

稲吉友江

しばらくは皆と佇む幡豆の海辺渚に近く兎島猿島
ステージの私は一つ息をする今流れくる「ビヨンザリーフ」

鈴木美耶子

瀬戸内のおだやかなる海眺めつつ幼と我らの声は弾みて
亡き人の形見の帯を身につける菖蒲あやめの花の手描きの染帯

吉見幸子

『俳句』

麦秋やサスペンダーの男来る

植村公女

パンチパーマなんじゃもんじゃや梅雨じめり

母の黙石頭の父濃紫陽花

梅雨の閻海亀さがす白波や

柳田皓一

屋久島の瀑布を濁す豪雨かな

一言にプツと吹き出し百合の花

敷石にわびさび楽し苔みどり

陽子

雷遠く師との別れを告げし雨

色づくも又色変はる額紫陽花

隠沼に夏うぐひすの宿りをり

小柳千美子

父の日の電話短かく切られけり

山裾の静けさに熟れ枇杷灯る

私の一首

皓皓^{コウコウ}と二尾に割りし竜頭の岩ヒゲなし三木の冬木白じろ

夏目勝弘

伊藤左千夫と長塚節がお題の「瀧」のために日光へ旅した。その時の左千夫の竜頭の滝の歌より「二尾」の語句を頂いた。

左千夫は滝の流れを一首にしたが、自分は竜頭の岩を歌ってみた。

真似ること得ることが多いと思うその場所に立ち同じ歌材で作ってみる。その繰り返しを今やっている。

萬葉集をアララギの先師たちの

羚羊も猪も住み縦断するこの山道は昔の旧道

林伊佐子

若い頃住んでいたふる里は、隣りの村に行く人や、商売をする人達が通っていました。残されているこの山道を通じて羚羊や野猿が村の作物を荒らすようになり、村の人達は農業をやめて、都会や、町に離散しました。老人ばかり残された過疎のふる里は寂しくなりました。帰省した時、旧道を散歩して、野鳥や、四季の野花に会うのは楽しみです。

ピラカンサ鳥もねらわぬ草の中数多になりて赤きなる実を

半田うめ子

草の多き前の畑赤きなる実をにぎやかに鳥の来て鳴きつつも食べる事のないピラカンサの実は

夕日背にオルフェーヴルのラストラン赤茶が映える声援の中

森岡陽子

動物好きの私は、美しいサラブレッドの馬達が駆ける姿を見る事も大好きで、時々競馬場にも足を運ぶ、まだ若いオルフェーヴルの引退は暮も押し迫った時、有馬記念レースであった。美しい毛並みで観客が応援する中、それは見事な走り、優勝と言う有終の美を飾った。旗手と共に優勝馬だけの御褒美、ウイニング・ランの時、観客からの称賛の拍手はやまなかった。空は夕焼に染まり出し、それは美しい冬の日であった。

手招きし我を呼びゐしその姿訃報を聞きて蘇り来し

平松 裕子

読み返してみても推敲不足に気がきました。「手招きし」は分かるようで分からない。口語そのままでした。「手招きにて」というのが本当だったように思います。また「来し」も推敲していたら「来ぬ」としたと思います。最近を作り放して提出することが多いので反省になりました。この月は訃報続きで、この方もこの時お会いしたのが最後となりました。

庭隅のいつもの所に今年またツルボ一株紫の花

山口千恵子

毎年初秋になると、知らぬまに庭隅に一塊になって淡紫の花を咲かせるツルボ、日本原産の球根で殖える野の花です。

植えたおぼえもなく、自然に生えて花咲く、雑草とはいえ何となく親しみさえ感じて、眺めていました。毎年同じ心地よい淡紫の花に、自然の命の不思議さを感じさせられました。

私の身にあと幾度の花ならむ知らざればこそ未知なればこそ

弓谷久子

五月号三河アララギ誌上の内藤さんの挽歌で松井さんがなくなられた事を知りました。昨年四月御津山歌会に講読会員の松井さんも内藤さんと一緒に出席されていて休み時間に側に来られ、私の歌いたかった事を歌って下さった」と私のこの一首をととても褒めて下さり親しくお話をする事が出来ました。

一期一会余りにも短かいえにしでしたが何故かほのほの心の通うそんな一ときが忘れる事が出来ません。

野の花の名前も知らぬ花ばかり一つ一つを草生になでて

青木玉枝

友と旅に出で色々な田舎の風物も楽しんだ十年間今この山里に住んで見て四季を通じ野の花に会い又手をふれて知らない野花もこの目で見て、又手にふれて知らない野花がこんなにあるとは散歩に出る度立止つたり坐つたり一刻は淋しさも忘れ道ゆく人は不思議な顔をして通りすぎます。こんな自然な生活をした事もなく淋しさと安らぎの日びふと都会の雑音がたまらなく恋しい日もあり残生はよく考へ進みたいと今は希っております。

ある自然科学者の手記 (27) 大橋望彦

『想定外』

世の中に色々と希望することは沢山あるが、これは人間の欲望を満たすものに関連している。また、この欲望があつてこそ、人間は生きていける。しかし、我々が日常接する自然界には、その欲望に満ち溢れた営みが行われており、欲望は何も人間に限ったことでないのも確かだ。この欲望に出来る、もしくは適うことと、出来ない、適わないことがあるが、これを決めているのは誰なのか。これは、何でそうなっているのが、永遠の謎でもある。欲望が限りなく拡がるとそれは夢となってしまう。夢が適うと言う事は、理想には違わないが、滅多に無いことの代名詞ともなる。其れには何処かに限界があると言うことでもあるので、その限界が判れば、物事に諦めも付き易い。ところがその限界が良く判らない。この限界は人によつても色々と異なる。これはその人の能力の差であると言う観かたもある。ヒトを対象として、健康診断などでよく目にする数値がある。正常値と以前は言っていたが、現在は基準値と言ひ換えられている値である。これは健康なヒトを多数の件数の値として統計処理して得られる、ある幅を持った数値のことである。どうしても個体差が生ずるので、少なくとも病状の見えないヒトの最大値と最低値を夫々平均して得た数値である。病院に診断を求めて行

けば、必ず血液を採られ、この一般検査値を測定される。色々な項目があるが、それぞれその値には意味があるのだが、医師はなかなかその意味は話してくれないで、医師だけが納得しているようにも思えてしまう。然し、これは極当たり前のことを知るのが目的でもある。何の項目が基準値から外れた値を示しているかを知れば、その原因となる病気を演繹的に知ることが出来るからである。従つて、この基準値は健康であるヒトとしての期待値とも言える。これは健康なヒトを想定した期待値なのである。ところが期待した値ではない異常値が出てきた場合は、病的な値と解するのである。これが検査異常値と言うことである。そうであるから想定外の異常なのかというと、これは違う。例えば、心臓に異常を感じたヒトが診断を受けに来たとして、血液検査の結果は、コレステロール値が異常に高かった。このことは実は想定外の事ではなく、医師には十分想定していることの結果なのである。心臓の状態が悪いのは血液の循環が悪くなつていて、通常の血液を組織・器官に送り込むには余分の働きを強いられるからである。この血液の循環が悪くなつて原因として考えられるのが、血管内にコレステロールがくっついて管が細くなつてることから無理に血液を通すために圧力を高くしなければならなくなつていて、所謂高血圧症である。元と言へば、血液中のコレステロール値が高い所為で、食物のコレステロールを摂り過ぎているのが原因であることが判る。これは全て想定することが可能なのである。この事は、言わば科学の進歩に従つて、細かい事までも想定することが

出来たからであるが、医学の分野でもこの想定が極めて難しい事も未だある。その例として、細菌やウイルスの感染症がある。最近では、抗生物質によりこの様な感染症は治癒することが多いのだが、中には細菌やウイルスがこの抗生物質に対して抵抗するものが突然変異的に出てきて、従来の抗生物質では治癒しないことも出てきた。色々な抗生物質を使っても直ぐに抵抗菌が現れると有効な抗生物質にも限界が来てしまう。これには次の手段として、ワクチンのような物で抑えなければ蔓延してしまつたならば大変なこととなる。このワクチンと謂えども、抵抗菌の出現は想定することが難しいので、出現してからそれに対応するワクチンを生産して対処することとなる。これでは遅いのだが、致し方ない。常にこの追つ掛けごっこをしている事となる。幾ら科学的根拠があつたとしても、突然変異には適わないのである。

想定外では、日本国中が巻き込まれたのが敗戦である。終戦の前夜まで日本は勝つものと想定されていて、疑う人は極限られた人達だけであつた。然し想定外にも、敗戦と言う事態となつてしまつた。これは日本国中が酷い状態に否応も無く置かれたのであつた。然し、その日本国が立ち直つたのは、国民の努力もあつたが、当時進駐したアメリカ軍の日本国民性と人心を把握して、天皇制を形の上で残したためである。同時に、教育勅語が残されていたことを想定すると、随分現在とは世の中が異なつていたのであろうが、想定外の事である。

天然現象には想定外のことが多々存在する。それは、その

現象の基盤となる科学的解明が遅れているのと、条件が複雑過ぎて、想定する根拠が曖昧に成りがちであるからで、その典型が地震予知であろう。火山の噴火とか、何々プレートと言ふ地殻構造の摺動により生ずることまでは判つてきたものの、その位置や時期、規模に関する想定は極めて曖昧の状態であり、唯、確率論を頼りにするといふ状態である。そうなると、想定することが非科学的であると言わざるを得ない。それでも確実に何時かは生ずる現象であることは確かのようにあるから始末が悪い。従つて大飯原発の運転差止めの判決が最近あつたが、懸命の判決であつたと言える。今日本での原子力発電の技術水準は、どの程度あるかは判断の基準も公表されて無い状態では想定しようも無く、また、その管理体制に関しては、電力会社の信用はまるで無い。どの程度の地震や津波が襲つてきたことを想定すること自身が科学的根拠に乏しい状態では、当然の結論である。人命の尊さを天秤にかける以前の問題であろう。

『想定外』と言ふ言葉が最近多く使われ過ぎていくように思う。想定にはそれ相当の判断基準というものがあつての話であるが、その基準も曖昧であるのにさも立派な想定がされていたと信じているのでそのような結果が想定外と成つてしまうからである。判断基準には科学的根拠が幾ら確りしていても、政治的判断が加われれば一般人にはサツパリ判らなくなつてしまう事もある。そうなつた時には、もう運を天に任すことで、何も想定することをしない方が良さそうだ。これら、希望の限界であろうか。

絹の話 (45)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

昆虫食の落とし穴

人類の食生活の歴史の中で、石器時代以前の主要食物として草木の芽や根、球根、木の実、魚介類に次いで季節的に昆虫（幼虫、成虫）が大量の捕食されていた様で（糞化石研究による）、蛋白質を豊富に含んだ貴重な食糧のようでした。しかし農耕文化の進展と共に昆虫は次第に食べなくなつて来ました。

とは言え、今日の日本でもイナゴや蜂の子は広く食べられていますし、蚕の蛹も長野県辺りでは好まれている様です。中国の東北地方（瀋陽）の高級飯店に行くと同様に柞蚕の蛹料理が定番です。ベトナムやタイなどでは街路で蛹（エリ蚕）があちこちで売られています。多様に調理された缶詰も豊富です。インドネシアの人達はクリキュラ蚕の蛹が好みます。ニュウギニアの奥地等の石器時代の生活の人々も色々な昆虫の幼虫を好んで食べています。鳥類は総じて虫を食べることは誰でも知っていますが、猿も天蚕の糸を吐く直前の体が透き通つて来る頃を見計らつてよく食べます。

それでは何故人は昆虫をあまり食べなくなつて来たの

でしょうか？農作物の方が美味しかったからでしょうか？農作業が忙しく昆虫を採取する暇が無くなったからでしょうか？どうもそうではない様です。

昆虫は他の生物と同じ様に種々の酵素を持っていて、食べた人に病気を引き起こす事が有ったからではないでしょうか。

「かっけになる」

ナイジェリアの熱帯雨林地帯で昔からアナフエ蚕（100〜500匹虫が共同で作る縦30cm位の世界で最大の繭）が採れる時期になると運動失調を訴える人が増えるのは何故か、を研究した日本人（Nisimuraら（2000））がいました。

その原因は現地の人々がアナフエ蚕の蛹を生で食べる事に起因する事が判りました。

アナフエ蚕の蛹にはビタミンB1（チアミン）を破壊する酵素「チアマナーゼ」が大量に含まれているので、多く生食した人はかなり重傷になった様です。猿もこれには手を出さないそうです。加熱して調理された蛹はチアマナーゼが不活性化されて食べた人も発症していません。この事は昆虫が食害から身を守るため色々な防御装置を備えていると考えられます。

古の人々は雑多な昆虫食は脚気等の病気にかかる事があるので農耕文化と引き換えに昆虫食からしだいに撤退したのではないでしょうか。

ワラビ等の山菜や魚の刺身には極少量のチアミナーゼが含まれています。日本人は複合してこの様な物を多食しますので脚気になり易かったのかも知れません。牛がシダの沢山生えている牧場で死んだり、鯉（鯉の小腸にはアナフエ蚕の蛹の1/9のチアミナーゼを含む）を食べた狐が死ぬ例が有るそうですが、脚気によるものだと思います。長い間脚気は日本人の風土病と云われて来ましたが、その訳が少し判った様な気がします。

【注意すべき昆虫食】

そこで次世代の有望な蛋白資源として、僅か約60日で1万倍の蛋白質を作る家蚕に世界の注目が集まっています。また宇宙探査旅行は途方もない年月がかかります。持参出来る食糧には限界がありますので、宇宙船内でコンパクトに再生産出来る蛋白質の研究が盛んで、家畜化された家蚕が注目されています。

ところが家蚕の蛹にはアナフエ蚕の蛹に近いチアミナーゼが含まれていますので調理方法に注意が必要です。

かつて野麦峠の話で有名になった製糸工場で働く多くの女工さんが次々に病気に倒れた話ですが、粗食で過労が原因と言われていますが、彼女達は糸をあげて残った蛹を時々生で食べていたと聞いた事があります。脚気にかかって体がダルクなり、それでもサナギを食べ続ければ心臓機能も衰え、死に至ります。この様な人はいなかったでしょうか。

鳥は虫をよく食べますが病気にならないのは、チアミナーゼを分解する酵素を持っているのでしょうか？土蜘蛛を鷲に与えると半日位で動かなくなり1日程で死んでしまいます。

【昆虫食ブーム】

東南アジアでは広く蛹や色々な虫が好まれて食べられています。長い間の生活の中で安全確認がされているのでしよう。昨今ではエリ蚕の5齢の幼虫が旨いと蛹になる直前に町で売られるケースも出て来ました。

チアミナーゼの中には耐熱性のももある様です。で、温故知新が大切です。

日本でも昆虫食パーティーが若い人に人気が出て来ました。ただインドでは殺生を嫌う風習から蛹を食べる習慣は無い様です。

物理学者と詩歌の世界 (55)

一石

ジョン・シュワルツ

ジョン・ヘンリー・シュワルツ (John Henry Schwarz, 1941-) は、米国の理論物理学者。ハーバード大学で数学を専攻 (1962)。カルフォルニア大学バークレー校にて理論物理学の博士号を取得 (1966)。1966-1972年、プリンストン大学の助教、その後カルフォルニア工科大学に移籍。現在は同大学教授。シュワルツは「ストリング理論の父」ともいわれ、「超弦理論」を創始し発展させる上で大きな貢献をした。ディラックメダル受賞 (1989)、米国物理学会ハイネマン賞 (2002)、基礎物理学賞 (2013) (参考資料1)。

「超弦理論」(スーパーstring理論、超ひも理論ともいわれる) は、自然界のすべての基本法則を統一的にあらわす物理学の究極的な理論の候補として有力視されている理論である (参考資料2)。その最初の試みは1970年代の前半になされたが、当時はあまり注目を集めなかった。それが物理学の中心的なテーマになってきたのは1984年頃から。その経緯においてシュワルツが果たした役割について以下に解説する (参考資料2、

3)。

シュワルツは1974年に、J・シャークと共同で、超弦理論がインシュタインの一般相対論 (重力理論) を含んでいることを示し、超弦理論を使えば素粒子の究極の統一理論が作れるはずだと論じた (注1)。しかし、1974年当時の超弦理論には、素粒子である電子やクォークを組み込む方法がわかっていなかった。このため、研究者のほとんどは、超弦理論を見放し当時主流であった「ゲージ理論」に基づく「標準模型」の研究に打ち込んでいた。その後の10年間は、世界中で超弦理論の研究者が数人しかいない時代が続くのだが、シュワルツはあきらめなかった。そして、ついに1984年に、当時若手研究者だったM・グリーンと共同で、超弦理論に電子やクォークを組み込む理論的機構を発見。超弦理論は一躍素粒子論の主流の研究分野となったのである。

自然界には基本的な物質としてクォークとレプトンがあり、それが4種類の力 (電磁力、弱い力、強い力、重力) を通じてお互いに作用し合っている。そのうち重力以外の3種類は、「標準模型」と呼ばれる理論で、ほぼ完全に理解されるようになった。「標準模型」は、1970年代におよそ10年をかけて、「ゲージ理論」の発展とともに完成した。その構築に貢献した物理学者については本シリーズでも折に触れてご紹介した (ヒッグス、南部陽一郎、ワインバーグ、グラシヨウ、ルビア、レーダー

マン、ヴェルトマン、トホーフト、グロスなど)。この模型は、現在の素粒子実験で得られるあらゆる結果を矛盾なく説明するなど大きな成功を収めている。このように、1970年代はゲージ理論とそれにもとづいた標準模型が進歩し、完成した時代であった。一方、重力はゲージ理論では扱いきれないため、しばらく考慮の対象外とされたのである。つまり、重力も含めて、すべての力と物質を統一しようという超弦理論は、あまりに野心的過ぎると考えられていたのである。

一方、シュワルツは孤立しながらも粘り強く超弦理論を追求し続けた。1970年代の彼の努力は、圧倒的なゲージ理論の発展に隠され、ほとんどかえりみられなかった。しかし、上述したように1980年代になると、「標準模型」はもはや完成したものとなり、いよいよ最大の懸案であった、「重力を含む統一理論」に進む機運が高まってきた。そのような雰囲気の中で、1984年にグリーンとシュワルツの一連の研究が発表された。それは、超弦理論が、従来の場の理論ではどうしてもできなかった重力の量子論的な記述まで含めて、矛盾なく構成できていることを示すものであった。これがきっかけとなり、いわゆる「ストリングブーム」が爆発的に始まったのである。

シュワルツは、その後も、超弦理論における双対性の重要性を早くから指摘し、1995年の「第2次ストリ

ング革命」を予見していた。また、2004年には3次元超対称チャーン・サイモンズ理論についての重要な論文を発表、これは2008年の「M2ブレン・ミニ革命」の種となった。シュワルツは、時代を何年も先んじる発想で、常に新しい方向を開拓してきた(参考資料3)。
71歳のシュワルツが述べた言葉(参考資料4)。「宇宙の謎を解明するにはまだまだ時間が掛かる。自分が生きている間には宇宙の謎は解明されないだろう。でも、宇宙の真理を見ないまま死んで行くのは無念だけど、謎が全て解明されてしまったら・・・それはそれで寂しいのだ。」

注1…2001年に開催された国際会議での席で、シュワルツは当時を振り返って、「この発見をしたときに、私は超弦理論の研究に生涯を捧げようと決意した」と述べている。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia: John Schwarz
- 2) 川合光『はじめての超ひも理論』(講談社現代新書)
- 3) 大栗博司のブログ
- 4) NHKスペシャル「神の数式」(2013年12月29日放映)

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十七 鹿児島寿蔵

鹿児島寿蔵はアララギの歌人で、はじめ島木赤彦に、のち赤彦没後に土屋文明に師事した。生涯二十四冊の歌集を出した。

しりぞきてあらむもゆくも現在^{いま}死ぬるぎりぎりの生
と君思はずや 昭和二十年『青求』

疎開のまま世を退きこもるさへもやすからじとふ此
の一書あり

太平洋戦争敗戦後の作。実はこの二首が茂吉を詠んだものだという明確な証拠はないのだが、後に茂吉を詠んだものに通ずるのでここに挙げた。茂吉は敗戦の年の四月から故郷の山形県金瓶村に疎開しており、その茂吉のおかれた経済的精神的状况を作者は踏まえているのである。

ましらひげふすさに時にひかるをば仰ぎてわれは言
問ひ申す 昭和二十一年『青求』

いかづちの鳴り終らぬに心様^{こころ}はや晴れしとのらすま
みのかがやき

金瓶で敗戦を迎えた茂吉は帰京も叶わず、金瓶に留まることもできない状況に追い込まれ、翌二十一年からは門弟の住む大石田町に移った。右の歌は「大石田藤部邸にて」の詞書をもつ。茂吉は大石田で床に伏すことの多い日々を送っていたが、その茂吉を訪ねたときの様子を詠んだのが右の歌である。

一首目には身体的にも弱っている様子をうかがうこともできよう。茂吉はこの後、「御めにかかり色々御話承り、幸でありました」と礼状を書き送っている。

きそ一夜とどろぎたりし雨はれて緑くろぐるし桂の
大樹

まひるまも蚊帳の中にある君の聞きほりたまふ東京
のことを

これもこの時の作である。一首目の桂の木は茂吉も、「四百年の老の桂樹うつせみのわがかたはらに立てる楽しさ」「黄の雲の屯したりと見るまでに大樹の桂もみぢせりけり」（『白き山』）と詠み、茂吉を訪ねた人たちも多く詠んでいる。茂吉はこのころ東京の様子を知りたがっていて機会あることに尋ねているのだが、二首目は

それを詠んでいる。

身体のおぶらしぼりし声として「ひとり歌へる」

四十首あり

昭和二十二年『麦を吹く嵐』

白髪の長きひからせ臥しいます面のまぼろしありありと見る

罪の意識おそろしきまでほりさげし此の人を見よ此の孤独を見よ

題詞に「夕食後『人間』五月号所載の斎藤茂吉先生の作品を読む」とある。一首目に「四十首」とあるのは、『白き山』では一首を加えている。

この歌は、太平洋戦争の勝利を願う歌をもって国民を鼓舞したとして責任を問われることになったことへの思いである。一連中の「冬至の夜はやく臥所に入りけり息切のする身をいたはりて」「オリープのあぶらの如き悲しみを彼の使徒もつねに持ちてあたりや」などを踏まえているだろう。

三首目は、やはり一蓮中の「道のべに薨^ひ麻^まの花咲きたりしこと何か罪ふかき感じのごとく」「のがれ来て二たびの年暮れむとす悲しきことわりと思ひしかども」「くらがりの中におちいる罪ふかき世紀にゐたる吾もひとりぞ」「勝ちたりといふ放送に興奮し眠られざりし吾にあらずきや」を踏まえている。

鹿兒島寿蔵の右の歌は茂吉の「かなしみ」を深いところて読み取り自分のかなしみであるかのように詠んだ絶唱といえよう。

「アララギはわが雑誌」とぞ君詠みし歌に泪のいづるおもひす
同

この歌は不自由な大石田での流亡にも似た生活の中で茂吉が詠んだ「アララギはわが雑誌ゆゑ余所行のころ要らずと云ひて可なりや」(『白き山』)を読むと涙を催すと詠んでいる。

「アララギはわが雑誌」と詠むときの茂吉には創刊間もないころ伊藤左千夫を継いでその編集に当たったこと、一旦島木赤彦に移っていた編集人の仕事を再び引き受けたことなどが思い出されたと思われる。「わが雑誌」の真意は帰京後の日記によつて明らかになる。それは、「柴生田君来り、アララギハオ自分(斎藤茂吉)ノモノダカラモウ少シ骨折ツテモラヒタイ趣ノコトヲ云ツタ、今時分ソナコトヲ云ツタトコロデ既ニ手オクレデアル。スデニ土屋幕府ガ成立シタ後デハナイカ」(昭和二十三年二月八日)である。鹿兒島寿蔵が右の歌を読んだ時この真意通りに読み取ったかどうかはわからない。

楽しい時間 21

山本紀久雄

2014年6月30日

海のカキ、何度か食べてお腹を壊したことがあり、それ以来苦手のアイテムとして、なるべく食べないよう敬遠していた。

ところが、偶然、十数年前にカキ関連企業の顧問になって以後、カキを食する機会が多くなり、加えて、この顧問企業、海外に関心高く、世界中のカキ養殖実態を知りたいということで、世界の養殖地を訪ねる旅を始め、その記録を出版することになった。

最初の出版は「フランスを救った日本の牡蠣」で、フランスのカキ養殖が病気で全滅という危機に、日本からマガキ稚貝を空輸し救ったという実話を中心に、フランスの文化的側面をカキからとらえ出版した。これが2003年のこと。幸いにテレビ局や新聞にも取り上げられた。

そこで、次は、世界14カ国のカキ養殖実態をまとめて「世界の牡蠣事情」として2009年に出版した。各国の養殖実態をまとめて分かる資料がないので、業界関係者から好評であった。その後も世界の各国への訪れを続け、今年の秋に「世界の牡蠣事情パートII」を出版する

ため今は校正をしているところ。

このような経緯からカキ関連業界とは何かと関係があり、6月21日(土)に開催された「第三回全日本カキ早むき選手権大会」に招待された。会場は東京都港区の会員制社交クラブ・東京アメリカンクラブ。東京タワーの真下ともいえるべき好立地のところ。

主催は(株)LA DITTAラ・ディッタ(港区)で、優勝者はアイルランド・ゴールウェイで9月27日に開かれる「カキ早むき世界大会」に出場する。

既に4月20日に広島市で「西日本予選会」が開かれており、ここでの上位三名と、この日の決勝戦前に開かれた「東日本予選会」での上位三名、合計六名によって優勝が争われた。



早むきを競い合う選手たち

●大会ルール

- ①生カキ30個をむく早さを競う
 - ②審査員がむかれたカキの美しさを採点
 - ③カキむきの「早さ」「正確さ」「見た目の美しさ」を総合的に判断
- 審査のポイント



審査風景

- ①見た目の美しさ、しつかりむけているか、不備がないか
- ②きちんと貝柱がきれているか
- ③身に傷がついていないか（割れ目、ちぎれ、切れ目、傷、血液の付着）
- ④整然と美しく並んでいるか

東京アメリカンクラブに招待されたのは150名。政財界関係者、カキ関連業界、飲食業界関係者等で、後援はアイルランド大使館と大日本水産会。協賛はカキに関係ある企業。

優勝者が派遣される「ゴールウェイ国際オイスターフェスティバル GALWAY INTERNATIONAL OYSTER FESTIVAL」は、

1954年から毎年開催されている由緒あるカキ祭り、この祭の中心イベントが世界カキ剥きチャンピオン大会である。2009年に開かれた「ゴールウェイ国際オイスターフェスティバル」について取材し、「世界の牡蠣事情・アイルランド編」で書いているが、この時は日本からの出場者はいなかつ



た。

全日本カキ早むき選手権大会は2012年から始まり、2013年は日本代表が世界の18人中12位と健闘している。今年の優勝者は東條飛馬さん、大阪梅田のオイスターバーにお勤めの男性。時間は4分19秒。二位は昨年ゴールウェイで12位だった藤井さんで4分20秒。たったの一秒違い。大接戦であった。

この東條飛馬さん、今年のゴールウェイでどのような成績を収められるか。

サッカーのワールドカップ同様、世界のカキむきプロの技術は優れている。ヨーロッパでは、カキに対する価値認識や、異なる養殖方法、食べ方の違いなどから、カキむき職人の位置づけが社会的に高く、中でもフランスでは「エカイエ」と称され、独自の地位を築き上げている。更に日本のカキより格段に勝る殻の硬さ、そのようなハンディキャップを超えて、どこまで日本人は行けるか。その実力が試される。その結果を待つのも「楽しい時間」だ。



右から四人目が優勝の東條さん

九十九里

夏目勝弘

二度目となる九十九里の目的は、ひたすら九十九里浜を歩くことのみとし、上総一ノ宮への外房線に乗る。

ここで昼食を摂らないと、食べる所が無いであろうと、駅を出た所にどこの駅前にもあるような、一膳めし屋があり躊躇はず入る。

今日のおすすめ「ブリかま定食八百円」を注文、ブリかまだから時間もかからないだろうと待つ、まだ出てこない、なのでしジャパンの負けたスポーツ紙を見る。

自分一人の客なのに、しかたなく店内を見回すと壁に、安部元首相、東国原元宮崎知事、多くの芸能人と店主のツウショットの写真や色紙に目を通すも、まだ出てくる気配さへない。

店主が椅子に掛けて居たので、三河の一の宮からと告げると、話しが進み神社の事をいろいろ話してくれた。

やつと出来たらしい、おかみさんが大きな盆に何やら、黒い大きな物体を乗せてくる。

でんと前に置れた料理を見ると、一キロもあろうブリの頭が黒ぐろと焼かれたもの。しばし時間が止まった。

どこから食べよう、少し開いている口に指を入れ二つに裂いた。湯気の立ちそのなかに油の光る厚らな身がある。

複雑な骨のすみまで身を取り出し食べた。
ご飯が副食のようなものである。油ほくなった口を、ご飯と

香物で調える。今から歩む十キロ余りのエネルギー源として。

まずは上総一ノ宮の女神様にお参りを済ませ、九十九里浜に向うための外房線を横切り少し家並のなかを行く、そして滑走路のような道が九十九里に向い伸びている。

広々とした田には水が張られ、さざ波が立っていた。昨日の迷いつつの歩みではなく、おのずと早足となつてしまふ。

今食べてきたブリかまから、思いが發展し明治三十五年の子規庵での事に思いが飛んだ。

長塚節より送られた兔を、左千夫が調理し食べたことに、子規に「煮兎憶諸友」の長歌がある。

こもごもの思いを巡らせているうちに、九十九里の浜に着いた。

九十九里のたひらはあめ地の

四方の寄合に雲たむらす

左千夫の歌のような今日の九十九里も雲が厚く全面に止まっている。

この海を左千夫先生よみたまひ

一生まねびて到りがたしも

文明もたびたび九十九里に来ている。土屋文明が左千夫宅に寄食したのは、明治四十二年四月十日から同年七月三十日までである。

五十回忌集まる百五十人その人知るは

四人となりたるかなや

文明のこの一首、結句の（なりたるかなや）は、いつ読んでも淋しく感ずる。

「氷魚」のことから (163) 岡本八千代

前回、子規の少年の頃の文章はどんなだったろうと書き出したのであるが、今回その次をと思つて読み出したところ、漢文調の文章で私にはとても読解してゆく力のないことを悟つた。

今回は、現在活躍中の俳人（船団の会）の代表、佛教大文学部教授の坪内稔典著「正岡子規」の少年時代の手紙文を参考にして書いてみる。まず「十二歳までの子規」の「前文大略」を写してみよう。

「前文大略」は尊老之御周旋を以て内約漸く相整ひ千謝万謝仕候然る処此頃「仄」に路人の言を聞くに当人の言語挙動あら／＼しく且性質も亦柔和ならざる由就而は乍御氣之毒一応御断り被下此段偏に奉希候不乙

追而当人之気性も相変り品行も亦正しく相成候へば早速婚礼可致候」

〔内約の婦の不品行を聞き媒介へ破約之文〕明治十二年——と。

明治十二年の時の子規は十二歳で、小学校の上級生であつた時の手紙文である。「前文大略」とは、「前略」のきちんとした言い方。「尊老」はあなた様。「内約」は内々の約束。「千謝万謝」は心からのお礼。（稔典著より）

これは、婚約者に、婚約を破棄してほしいと仲人に依頼した手紙である。——これを子規が小学校の教室で書いた課題

作文であつたといわれている。当時の遠山九郎という先生に書かされて、書いた作文。

「先生は『今日は婚約破棄の手紙を書きます。こんな手紙がきちんと書けないと一人前の大人にはなれません』と課題を出されたであろう」と著にあつた。……。

さて、現代の小学生、中学生は、かなり大人びたことを言つたり書いたりもするらしいが、明治の時代の小学生、たとえ上級生であっても、婚約について何も経験も体験もないであろう子供が、婚約破棄の手紙を書けるであろうか。

子規の母の父親、大原有恒（観山は儒学者）その子規の祖父に当る人にしつかりと漢学を勉強させられたからであるうか。いや、子規自身が幼いうちから聡明であつたからであるうか。私にはちよつと面白いユーモア的な子規のエピソードと受けとめたが。現代の生徒と教師の行程としてはおそらく問題になるかもしれない、なども思う。

前回の自笑文章の手紙文は、子規の明治十一年十一月の作文とされている。或る人が願つてもないほどの官職に付かれたその祝いに柑橘の一籠を贈つたことの手紙文であつた。

今回は婚約破棄の手紙文。いずれも小学生時代に書いたというから、驚きと敬服……。

当時、作文を書かせた遠山九郎先生は、子規の文章を評して、「文章穏和、作意愛スベシ」とほめてゐる。現代の稔典先生は、「人のうわさで約束を破棄するのはどうかかな」と……実は私も、どうかかなあ——」である。

「歴代天皇御製歌」(二十七)

賈名海屋資料館

『醍醐天皇』第六十代・在位八九七年(十三歳)―九三〇年(四十六歳)

醍醐天皇は、宇田天皇の第一皇子。摂政や関白を置かず、天皇の親政を行われた。

延喜の莊園整理令は、口分田を人民にわかち与えた。人格円満、「延喜の治」と理想的治世をされた。

「延喜格式」「日本三代実録」の編纂、後醍醐天皇の命の勅撰和歌集「古今和歌集」は「万葉集」に選ばれなかつた古い時代の和歌を選んで編纂され、紀貫之が「仮名序」と序文を記し、小野小町、在原業平、藤原組：萬葉以来の伝統を守った。和歌は、宮廷行事に確立されたのだった。

恋の御歌

あかでのみ経ふればなりけり逢はぬ夜も逢ふ夜も人を哀とぞ思ふ

しぐれつゝ、いろまさりゆく草よりも人の心ぞかれにけらしな

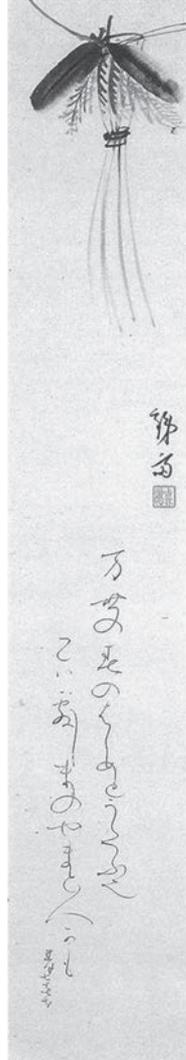
新勅撰集

ことのはスケッチ (428) 今泉由利

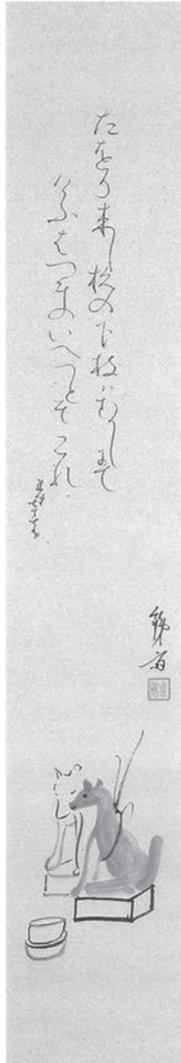
『貫名海屋 私注』⑧

大田垣蓮月七十七才の和歌、鉄斎三十二才の俳画

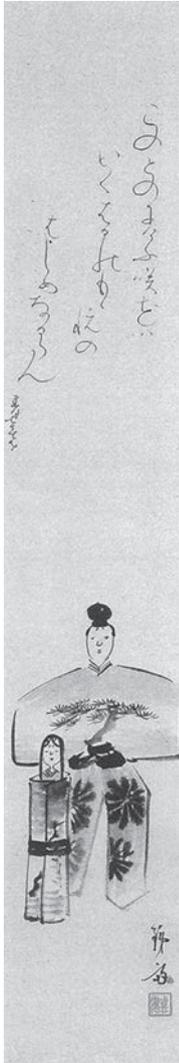
【二月】 万世の 春のはじめと うたふなり こは敷しまの やまと人かも



【二月】 たをり来し 松の下枝は むかしにて けふはつ午の いへづとぞこれ

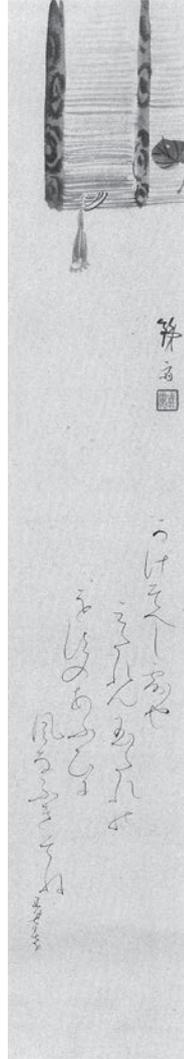


【三月】 このとのに けふ咲花は いくはるのも、悦のはじめなるらん



【四月】

かけそへし 処やみたれん 玉だれの
をすのあふひに 風なふきそね



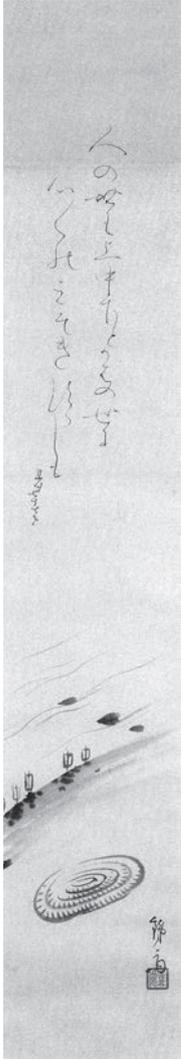
【五月】

ふきわたす あやめにおのか 時しらは
のきことになけ やまほとゝぎす



【六月】

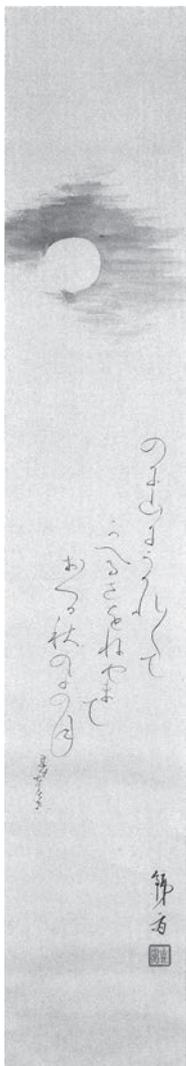
人の世も 上中下と かはのせに 心々の
みそぎすらしも



【七月】 世の中に みのなりいて、 おもふこと なすはめてたき ためし也けり



【八月】 のに山に うかれくて かへるさを ねやまておくる 秋のよの月



【九月】 しらきくの 枕にちかく かをるよは 夢もいくよの 秋かへぬらん



編集室だより【二〇一四年 六月】

○三河アララギに、名誉会員制度を設けます。八十才を迎えられますと、会費免除「名誉会員」とさせていただきます。自由奔走、思いの限りをお詠みいただきたく思います。三河アララギをしっかり守って参ります故。

○造影剤を使ったMRIで、頭部の血管の流れを調べました。結果は、何の異変もなく、健やかであることがわかりました。脳神経騒動を終りにし、おかげで「何か感じたら」すぐ対応していただける「私の安心の場」ができました。

○「歴代天皇御製歌」を書き、神武天皇の前の「天照大神」を知りたく、近くの中央図書館で、特殊の本も探し出して下さることに気付きました。

○アメリカ大使館が認証する書類が必要になり日本の中にある「アメリカ合衆国」にかけ入る。

○「死なないベニクラゲ」を見たたく、スカイツリーのすみだ水族館にゆく。前回確かに、プカプカ小さい赤いクラゲにみとれたのに、今回は、姿を消した。どうしたのだろうか。

○腰痛の友、放射線治療で少し被曝してしまった友、不都合を克服した友、一時間後に頭の血管が爆ぜるかもと脅されていた私と。皆何食わぬ顔をして、卓球をした。

○真ん中を人間にして、10に^{プラス}乗してゆく一番大きなスケール。10に^{マイナス}乗してゆく一番小さいスケール。いったいどんなに大きいか、どんなに小さいのか。

天国が10の19乗のところにあり、たった19乗するだけなのに、とてつもなく遠く、ということがわかった。

○仏像彫刻のクラスがある、八潮コミュニティ食堂の、瀬戸内海、大崎上島の無農薬レモンの皮の甘露、レモン・マーメイドが、これは本当に良い。

○大井町、きゅうりあん大ホールに於いて、友人の^フラフ発表会にゆく。ヒョウタンに鮫皮を張った太鼓。ハワイ語の唱。神へと導かれるような音楽。空気が動いているかの踊り。身も心も^フラフに浸った。

○原宿、大好きな大田美術館。「江戸の相撲と力士たち」大相撲の歴史：江戸時代に作られた「相撲錦絵」。人気力士の肖像、取組、日常生活など：どの場面も、チョンマゲを結った男達ばかりが描かれている。時代を経る興行がみえた。

○三河アララギを造り上げて下さる、印刷会社桜創美のすぐ近くに、なりもの入り、虎の門ヒルズが出来上った。様子を見にゆく。何もかも若い世代に移ってしまった、私にはもの淋しい新しさでした。

○時差の都合上、真夜中、夜を徹して。^ウインブルトンのテニスを見ています。私にはこれほど興味深いスポーツはない。頭脳、素質、身体能力、技術、気力、オーラ：すべてに優れていないと勝てない。

○年相応、年だからもう：自身で自身を甘やかす、抛棄する、そんな勿体ないことをしてはいけない。心で、自分好みの素敵な自分をつくりましょう。

和菓子街道 (94)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(17)

松阪の宿場町のはずれに、昭和レトロな雰囲気のお店を構える朝日軒は、明治中～末期頃創業した和洋菓子店だ。

こちらの看板菓子は「山ざくら」。松坂が生んだ江戸時代の国学者・本居宣長が好んだといわれる駅鈴の形をした最中だ。中には、風に舞う桜の花びらのような小豆を散らした春霞を思わせる白餡が詰まっている。

宣長は桜ばかりを詠んだ『枕の山』という歌集を出すほどの桜好きだが、特に山桜を好んだ。

〈敷島の 大和心を人間はば 朝日に匂ふ 山桜花〉

これは、宣長が61歳の時に描いた自画像に賛として書かれた歌で、「日本人である私の心は、朝日に照り輝く山桜の美しさを知る、その麗しさに感動する心だ」といったところ。日本最古の古典『古事記』



の注釈の最高傑作『古事記伝』を記した宣長が、「大和心」について簡潔に表した歌だ。

松阪の誇り、宣長の思いを伝える菓子「山ざくら」に郷土愛を感じた。

粒状の小豆を混ぜた手亡豆の白餡がぎっしり。

◆朝日軒本舗

住所：三重県松阪市愛宕町1-40

電話：0598-21-1405

お知らせ

▽九月号の原稿は、八月一日(金)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

近年、気象の変化がしきりに言われるようになりましたが、気象の不安定はなんとなく心の不安を煽ります。梅雨と言へどこの三河地方は雨も少なく六月末現在では梅雨らしくありません。ところが他の地方では豪雨のニュースや、東京の積る程のあられのニュースなど。はたまた、北海道の夏日など。天変地異という言葉が思い浮びます。そんな不安とは裏腹に、今年もまた紫陽花の美しい季節になりました。私の庭にも幾種もの紫陽花が、どれも甲乙付けがたき花を咲かせています。この花は誰それに頂いたものとか、これはどこそこの家のを切らせて頂いて挿し木したものとかが、それぞれの花に思い出があり、それぞれの人を懐かしみ、偲んで朝夕眺めています。

八月号がお手元に届く頃には紫陽花も終り夏のまっただ中。暑さに負けぬようお過ごし下さい。(平松)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たたちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年七月二十五日印刷 第六十一巻 第八号
平成二十六年八月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘

発行人

平松 裕子・山口千恵子

発行所

今泉由利
三河アララギ会
〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL (〇三)五九二四一〇六五

UR L
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九
E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜創美